
男装は当たり前ですが？

三原煉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

男装は当たり前ですが？

【Nコード】

N2267W

【作者名】

三原煉

【あらすじ】

努力で10代中盤で有名大学を卒業し、有名会社の社長として日々を過ごす零^{れい}。ある日、祖父から呼び出しがあり、祖父の元に訪れた零。彼女に待っていたのは名門私立高校への転入だった。色々と理由をつけられ、半強制的にいく事になった零。共学だと思っていたら、男子校で男装する羽目に。「まあ、いつも男装しているから大丈夫だ」「違う所で心配だ……」何でもできるが、ちよつと抜けている男装女性と個性的な生徒たちとの学園物語。

【1話】祖父の話はいつも突然である

「明日から紫原学園むらさきはらのがくえんに行ってくれないか？」

久し振りに父方の祖父に呼び出しがあった。

私は母方が経営している会社の社長で、下から来る書類をすべて見て、サインや朱印を押す毎日。

最近は、変な事がなくて、楽な仕事ばかりである。それもこれも周りのおかげであろう。

数年前は本当に酷かった。こんな事さえ、考える暇もなかったんだ。そんな時の祖父からの呼び出し。何か面倒な事でなければいいがと思った。

父方の祖父も母方の祖父も厄介事しか持ってこない。

母方の祖父は今、私や会社に口を出せない所に監視付きでいるから、何事もない。

父方の祖父は母方の祖父程、変な事は持ってこないが、時々思いついたような事を言つて、私を悩ませる。そこがなければ、いい祖父なのだ。

父方の実家に着き、祖父と簡単に挨拶をした。

祖父が挨拶の次に発した言葉は先程の言葉だった。

「……急ですね」

「仕事も減ってきたようだし、そろそろかと思つてな」

「一応、大学卒業しているのですが……」

しかも、有名なアメリカの大学だ。国内の大学よりも上の大学ではあるんだ。

「知っておる。誰が学費を出したんじゃ」

「お爺様です。なら、なぜ、今頃、私に高校に行けと言うのですか？」

「お前の両親が通った高校に通わせたいからじゃ」

そんな事で高校に行けと言うのはどうかと思う。私は一応会社の社長なんですが。

「ちゃんとお前の部下には許可をとった。2年ぐらいいなくても大丈夫だとな」

私の心を読んだか。いや、これぐらいは普通に分かる事か。

「……外堀を埋めてきましたか。まあ、貴方がそう言うのなら、通いましょう。」

でも、1年です」

「2年じゃ」

「……私は18歳ですから、普通は高校3年に転入だと思えますが？」

それ以外だと、年齢詐称になる。年齢詐称で警視庁の上層部にいる叔父に迷惑はかけたくない。

「留年している事になつとる。」

だから、2年に転入しても、年齢詐称にはなんないぞ」

ここまで頭が回るのであれば、私を使うのをやめてほしいと思うが、黙っておこう。

「……分かりました。では、2年通います。」

紫原学園についての資料は……」

「全て和輝君が用意してくれてる」

和輝は私の部下の1人であり、婚約者候補の1人である。

頼んだ事は早急に片してくれるので、私も祖父も頼りにしている。

「分かりました。呼び出しは以上ですか？」

「そうじゃが……もう少し年相応の言葉遣いをしてくれんか、零」

「それは無理です。これが私ですから」

「それは『上東零』（じょうとうれい）としてじゃろ。ああ、言い忘れていた。」

学校には『神前零』（かんざきれい）で書類を出しているから、間違えるなよ」

重要な事を言い忘れないでほしい。苗字はなんだかんだで捉えられ方が違うのだから。

『上東』を出した時には何が起こるか分からない

「分かりました。他に言う事はありますか？」

「幸運を祈っとるぞ」

「別に祈らなくていいです」

祖父の家から出ると、黒い車が止まっていた。

今回は和輝かな。状況的に。

「零ちゃん、話は終わったの？」

運転席から出てきたのは焦げ茶色の髪に眼鏡をかけた男性。

「遥か^{はるか}」

「僕じゃ不都合？」

「いや、状況的に和輝だと予想していただけだ。

遥こそ、ここにいていいのか？」

遥は私の部下であるが、グループ企業である科野病院^{しのの}の若き院長でもある。

私の部下の中でも私の次がそれ以上に多忙である。

「うん、今日はオフなんだ」

「オフなのに私の迎えに来たのか？」

「だって、今日、零ちゃんに会わなきゃ、またしばらくは会えないでしょ。」

それに一応、婚約者だから、対外的にね？」

そう、遥も私の婚約者候補である。婚約者候補と言っても、私も遥も結婚する気はない。

他の婚約者候補もそうだ。近い存在ではあったが、結婚しようと言う気持ちはない。

それはみんな知っている。だが、他の奴らはそうは思っていない。

「全く、面倒だな、お前の親戚は」

「まあね。でも、優秀な人が多いから、切り捨てる訳にもいかないからね。」

「ここで長話もなんだから、車に乗って」

「ああ」

私は助手席に乗る。

一応会社の社長で命を狙われたりするが、そんなのは数年前に全て叩いて、壊滅させた。

まあ、対外的には後部座席がいいが、今の時間はプライベートであるから、何にも言われない。

まして、運転席に婚約者候補がいて、助手席に乗れば、対外的には仲がいいと思われて、良い方向に向くだろう。

「そういうえば、紫原学園に行くんだってね」

「運転しながら、遥が聞いてきた。和輝あたりにも聞いたのだろう。」

「ああ」

「あ、了承したんだ。僕、断ると思っただけだ」

まあ、普段の私であれば、何も言わずNOと突き出すだろう。

「外堀を埋められたからな。まあ、私がいなくなった場合の想定が出来て、彼らにはいい経験になるだろう」

「そうだったんだ。でも、よく男子校に行く気になったね」

「……は？」

男子校だと……？

【2話】衝撃の事実を尽きられたが、あまり動じていない

「あれ？ 知らなかった？」

遙も驚いた顔をした。私はその事実を知っていると思っていたよ
うだ。

「何も聞いていない」

「そうだったんだ。零ちゃん、共学だと思っていたの？」

「ああ、両親が通っていたと言われたから」

「あー、昔は共学だったらしいけど、今は男子校だよ。全寮制で所
謂お坊ちゃま学校」

私は眉を顰めた。『お坊ちゃま学校』 私はその言葉が大嫌い
だ。

偏見かもしれないが、そんな学校に通う奴は我儘で屁理屈、俺様で
周りの事を考えない馬鹿な奴だと思っている。

「都心から片道3時間もかかるから、こっちに戻ってくるのも儘な
らないからね。」

あ、零ちゃんが考えているようなお坊ちゃま学校とは違うと思う
よ。

一応、零ちゃんの両親が通っていたんだから、由緒正しい学校だ
よ

「昔はそうでも今は違うかもだろう。まあ、もう全ての手続きが終
わっているのだから、私はグダグダ言わないよ」

「零ちゃんって昔から変にずれているよね。男と同じ部屋で生活す
るとかそこら辺は無頓着だし」

「ほとんど男装しているからな」

私は周りから見下されたくないと言う理由だけで男装している。

女性だからと言って、私の意見を聞かない者がいる。今はほとんど

いないが、数年前は多かった。

まあ、私の恐ろしさを知った後はあまり言わなくなったがな。

いまだに男装しているのはバラすと面倒だからと言う理由である。

男装している為か、普通の女性より男性に接する機会が多く、あまり警戒心がない。

襲われそうになっても、護身術で抑えられるしな。

そこら辺の男より強いからな。

一応、黒帯を持っているし。

「危ないと思うけど、まあ、零ちゃんだから、大丈夫か。

どちらかと言うと、相手の方も心配をした方がいいかな。

あ、何かやったら、うちの病院に連絡してね。揉み消すから」

「そうならないようにする」

遥は時々怖い事を言う。これが所謂『腹黒』だろうか。

私にとっては慣れた事なので、無視するが。

「あーあ、零ちゃんのセーラー服を見てみたかったなー」

「寝言は私のいない所で言え」

「本心だけど……着いたよ」

他愛もない話をしている間に自宅に着いたようだ。

まあ、元々祖父の家から自宅までそんなには慣れていないからな。

「ありがとう、遥」

「どういたしまして。学園生活、楽しんできてね」

遥は笑顔で私を見送る。私は遥の笑顔が好きだ。

だが、作った笑顔が多いから本当の遥の笑顔を私はあまり見た事がない。

どす黒い世界で生きているからこそその処世術ではあるが、昔のような笑顔が見たいと時折思う。

自宅は電気がついていていた。

中にいる人物が誰だか分かる。

玄関を開ける。

「おかえり、零」

私が言葉を言う前に中にいた人物が私に声をかけた。

藍色に近い黒髪につり眼気味の黒い瞳。私より背が高く、すらっとしている。

和輝である。

「ただいま、和輝」

「夕食作ってあるが、食べるか？」

「ああ」

和輝の料理は上手い。私もできるが、どうしても凝るのを作ろうとするから、よく止められる事が多い。

食べるのなら凝ったものがいいだろうと思ってるのが駄目なのだろうか……。

今日の夕食は一般的な家庭料理だった。

ご飯、みそ汁、肉じゃが、サバの煮物にほうれん草の胡麻和えとツナサラダ。

いつもと違うのは用意されているのが1人前ではなく、2人前と言う事だった。

「和輝も食べるのか？」

「ああ、食べる暇がなくてな。どこかのお方が予定より早く動いた為にな」

祖父のせいかな。和輝が悪態をつく所は初めて見たな。いつも私が見ない所でやっていたのか？

今まで知らない所を見るのは嬉しいと思う。だけど、顔には出さない。

「すまん、うちのくそ爺のせいで」

「いや、あの人も零の事を考えての事だから。」

零は年齢の割に大人びすぎている。後、口調も女性らしくない。「仕方ないだろう。今までの生活からしてみれば」

「そうだが、もう少し女性らしくなつて欲しい」

「男子校に行くのに女性らしくは無理だろう？」

「……誰から聞いた」

なぜここで怒る。私は何も変な事は言っていないぞ。

「遙から聞いた」

「遙さんか……あの人も忙しいのにこういう時に現れる」

和輝は遙の事をさん付けで呼ぶ。なぜ、さん付けなのか聞いたら、
「年上だから」と言う回答だった。

確かに私達の中では一番の年上であるが、昔から一緒にいる為、みんな、呼び捨てで呼ぶ事が多い。

だが、和輝だけは遙をさん付けで呼ぶ。和輝らしいと言えば、和輝らしいが、少し余所余所しいとも思ってしまう。

「……男子校と聞いて、あまり驚いていないな」

「聞いた時は驚いた」

「それでも、行くのか？」

「行くのは決まっている事だしな。私はグダグダ何も言わないよ」

「全く……零らしいと言えば、零らしいが、少しは考える」

「これぐらいの事で頭を使いたくない。別に男装して、過ごせばいいだけだろ」

頭の使うのは会社経営や組の事だけでいい。高校の勉強もどうせ今まで習った事の復習にすぎない。

「本当にこういう事に関しては無頓着だな」

「遙にも言われたが、私のどこが無頓着なんだ？」

「……自覚するまで言わない」

自覚するまでって……秘密と一緒にじゃないか。

【3話】詳細設定はもう少し考えてくれ

「分かった。じゃあ、明日から行く事になっている紫原学園についてと『神前零』の設定を教えてください」

『神前零』は自分の事であるが、入院して、留年している設定があるから、本来の『私』とは違うはずだ。

「紫原学園は小等部から大学部まである私立の学園で零が転入する高等部が都心から片道3時間かかる田舎にある。」

ほとんどの学生は小等部からエスカレーター式で進級している。数人は外部の中学から進学している者もいる。

高等部は全校生徒300人。1学年100人で。S・A・B・C・Dクラスの5クラス編成。

Sクラスは10人でC・Dクラスは25人。他のクラスは20人編成となっている。

クラスは成績順になっている。零はSクラスに転入が決まっている」

「まあ、Sでも飛びぬけるだろうな」

私の成績は。一応、大卒だから。

「その辺は周りを見て、手加減してくれ。」

学園側に出してある『神前零』の資料は小学生の頃、事故に遭い、入院。

1年程、病院暮らしをして、退院してからはリハビリの一環で道場に通いながら、家庭教師に勉強を教えもらった。

中学時代は親の仕事の関係で海外の学校に通っていた。高校時代は世話になった叔父が倒れ、面倒をみる為に前の高校を休学した。

その後、祖父の薦めで復学と同時に紫原学園に転入。となっている」

素晴らしいシナリオ。と言うべきなのか。まあ、今の私の背中にある傷と護身術の理由は出来ている。

背中の傷は和輝が言った事よりももっと古い傷だ。事故でついた傷ではあるが、詳細の時期を言っと、私の正体がばれる。この傷については色々噂が流れているからな。

聞いた設定なら、性格は素のままで大丈夫か。

「身体測定とかは大丈夫なのか？」

「その辺は遥が行くように手配してある。」

プールの授業時は見学できるようにもしてある」

「どういう理由で？」

「『胴体部分の皮膚が人よりも薄く、炎症を起こしやすい為、プール等の肌をさらす必要がある授業に関しては参加させられない』」

「……少し無理やり感があるな」

いや、少しでもないな。しかし、それで了承する学園側も学園側だな。

もしかして、金を注ぎこんだか。もったいない。そんな金は他の事で使ってくれ。

「それは考えた本人に言ってくれ」

「誰が考えたんだ？」

「遥さん」

「……遥らしくないな」

「確かに……まあ、気持ちは分かるが」

「？」

「気にするな。もう片付けに入ってもいいか？」

「あ、ああ」

そういえば、夕食時であった。食事自体はもう食べ終わっていたから、後は片付けである。

「片付けは私がやるから、和輝は明日必要な荷物をまとめてくれな
いか？」

「……普通俺が片付けで自分でまとめるものだろう」

「下着は自分でやる。制服や筆記用具とかはもう用意しているだろ？」

和輝の事だ。全て新品を揃えているだろう。制服に関しても、私のサイズは全て把握しているから、ぴったりのものを用意してくれる。

「……分かった。食器、割らないように気をつけるよ」

和輝はそう言って、明日の準備に取り掛かった。なぜかいつも私を心配するような言葉をかける。

これでも、18歳で立派な大人であるのに。4つ年上だからと言って、こつも子供扱いされるのは嫌だな。

仕事では絶対子供扱いしないのが唯一の救いか。

食器の片付けも終わり、明日の準備も終わり、私は会社の書類に目を通していた。

さすがに2年も会社をあけるなんて、考えていなかったから、早急に自分の仕事を終わらせる。

「トラブルは全部そっちでなんとかできる？」

「ああ、元々零が表に出なかったおかげで社長は俺だと思っている人もいるからな。」

外部は俺で何とかできるが、身内に関しては零が必要になるかもしれない」

私は社交界とかそういうのがすごく嫌いなので、外に出ない。代わりに和輝や遙達が出席してくれるので、対外的には良好だ。

「身内に関しては仕方ない。何か不正とかあったら、すぐに呼んでくれ。野放しにすると、後が大変だ」

「分かった」

「そう言えば、朱熹と梁は？」

朱熹と梁は和輝や遙と同じく私の部下であり、婚約者候補の事だ。朱熹は和輝と同じ年でグループ企業の篠良木芸能プロダクション

の社長にして、看板モデル。

映画やドラマの出演オファーもあるらしいが、全部蹴っているらしい。

そんなのに出ていたら、社長の仕事ができないとこの間言っていた。

梁は私の2歳年上でグループ企業の苑汰警備会社そのたの若き副社長。

数年すれば社長になるが、事務作業が大の苦手である梁が社長になるのはまだまだ先であろうと私は予想している。

言っていないかったが、和輝はグループ企業の錫羽良ホールディングすけはらの社長でもある。

まあ、私が彼らが経営している会社の元締めである上東グループの跡取り（今は引き継いで社長）だから、婚約者候補になっただけである。

「2人は仕事が忙しくて、明日も来れないと言っていた」

「そう。まあ、2人には早く仕事覚えてもらいたいからな」

「確かに。いつまでも零にやってもらおう訳にもいかないからな」

朱熹と梁は和輝と遙に比べて、仕事が出来ない方である。まあ、普通の人に比べれば、処理速度は倍だけど、和輝は遙はそれ以上の処理速度だ。

間に合わない部分はいつも私が処理していたが、これからはそうはいかない。

2人にはこれから頑張ってもらわないとな。

「さて、明日からの仕事を頑張るか」

「……学園生活を『仕事』と言うのは零ぐらいだな」

私にとって、『社長』も『高校生』も職業であるんだ。それなら、『学園生活』を仕事と言ってもおかしくないだろう。

まあ、そんな事を言った時には和輝は盛大なため息をつくんだろう。ここまで和輝が表情を出すのは幼少時以来で楽しいが、これから迷惑をかけるだろうから、この辺にしておこう。

明日からの学園生活、普通ではないのは目に見えているから、普通になるように一応は努力するか。

【4話】初日から変な奴に絡まれた

翌朝、私は用意されていた制服に袖を通した。

予想通り、サイズはぴったり。

朝食は和輝が用意してくれた。

ご飯・みそ汁・焼き魚に昨日の残りの胡麻和え。

もちろん、味はおいしい。家事ができない女性には優良物件であるが、和輝に集まってくる女性のほとんどは和輝の資産目当てだから、和輝は見向きもしない。

そういう女性が寄りつかないように私の婚約者候補も取り下げることはない。

他の婚約者候補たちも同じ理由である。早くちゃんとした彼女を作ってもらいたいと私は思う。

朝食も済み、学園に行く準備をする。

準備をすと言っても、ほとんど昨日の内に終わらせたから、あまりやる事がない。

「本当に大丈夫か？」

「大丈夫だ。零は心配し過ぎだ」

そうは言われても、私の会社であるのだから、心配の1つや2つある。

私がいっ死んでも大丈夫のようにいつも準備していたが、こんな形で一時期だが会社から離れるとは思っていなかったから、自分の気持ちの整理が出来ていないようだ。

「零、会社の心配するぐらいなら、少しは自分の心配をしる」

「なんで自分の心配をしなきゃいけないんだ？」

会社は私の下に何百人の社員がいる。彼らを動かす、迷惑をかけ

ないようにするのは当たり前だろう」

「……分かったよ。学園まで送るから、荷物を車に入れてくれ」

「ああ、分かった」

何か憐みの目で和輝が私を見ていたが、私は変な事は言っていないはずだぞ。

私と和輝は車に乗り、3時間かけて、目的地である紫原学園に着いた。

なぜこんな辺鄙な所に学校等造ったんだと思ったが、心の中にしまっておく。

車から降り、和輝から荷物を受け取る。

「ここからは一人だが、大丈夫か？」

「大丈夫だ。いつまでも子供扱いするな」

少なくとも、ここに通っている奴らよりはましだと思います。

「週末には会いに来るから」

「その時は溜まった書類を必ず持ってこい」

「……分かったよ」

和輝は諦め顔でため息をついた。ここの生活も大事だが、仕事も大事だからな。

「じゃ、頑張れよ」

「ああ」

和輝はそれだけ言うと、車に乗り、来た道を帰っていった。

さて、私も行くか。荷物はキャリアバック1つと学校指定の鞆1つだけ。

他の荷物に関しては全て宅配だ。まあ、私はあまり物に執着しないから、必要最低限の物以外は私物はないから、他の奴らよりは少ないだろう。

しかし、正門から校舎まで続いているこの道は何の意味があるの

だろう。

長いだけで何も生産性がない。正門にあった来訪者用のインターホンは人件費削減に大いに役立つているが、セキュリティはどうなっているだろう。

さすがに放電はしていないだろうし、24時間監視モニターか？

どこの警備会社を使っているか、知りたいな。

「あつれー？ 見かけない顔だね？ 転校生？」

どうやらここに来て初めての生徒遭遇のようだ。

第一印象

『チャライ』

髪は染めている金髪。目は黒い。身長は私より高いが、梁と同じくらいだから、175くらいだろうか。

制服は乱れに乱れている。ワイシャツは第2ボタンまで開いており、学校指定のネクタイはちゃんと縛っていない。

私の苦手な人種だ。まあ、稀に『チャライ』が、根はしっかりしている。奴もいるが、そんなの絶滅危惧種並みだ。

最初から印象を最悪にさせる訳に行かないから、無難に挨拶した方がいいな。

「はい、今日からこちらでお世話になる神前です」

作り笑顔も完璧、のはずだ。なんせこの笑顔の師匠は遥だからな。そうそうバレない。

「かんざきちゃんか」。下の名前はなんて言うの？」

誰が教えるか。

「すみません。初対面の人に名前は教えるなど義兄に言われているので……」

嘘だがな。家庭情報では両親は健在だが、海外にいたので、身元引受人は祖父となっている。

まあ、バレた時は従兄を兄と慕っているとさえいい。

「ふん、過保護なお兄さんだね」。これから学校に行くの？」

「はい」

「荷物持ってあげようか？」

遠慮する。もう関わるな。

「大丈夫です。これぐらい自分で持てます」

「ふうん、かんざきちゃんって警戒心強いんだね。いじめたくな
つちゃう」

返り討にしてやる。まあ、そんな事は言えないので、笑って濁す。

「百衣ももい、そこで何をしている」

第2の生徒遭遇。

第一印象

『優等生』

最初に会った生徒とは正反対できちつと制服を着ており、黒髪黒
眼。身長は180ぐらいだろうか。

チャライ生徒は百衣と言う名前か。百衣は確かファミレス等のチ
ェーンレストラン経営の大手企業だったな。

「あ、貴き式しき。おはよ〜」

「もうすぐホームルームが始まるぞ。……隣にいるのは誰だ」

「彼は転校生のかんざきちゃんだよ〜」

そろそろそのちゃん付けはやめてほしい。鳥肌が立つ。

「ああ、君が神前君か。俺は生徒会副会長の水之貴みなのかいぢ式。

君と同じ高校2年で同じクラスだ」

「神前です。宜しくお願ひします」

生徒会副会長か。私と同じクラスと言う事はSクラス。それなり
に頭がいいと言うことか。

水之は確か情報システム系の会社だったな。情報システム系は全て
和輝に丸投げだけど、私も少しは勉強しといた方がいいな。

「後、6分ほどでホームルームが始まる。その前に職員室に寄らな
いといけないから、早く行った方がいい。職員室の場所は分かるか
？」

「はい、こちらに来る間に校舎の地図は覚えました」

3時間も暇だったからな。

「そうか。だが、念の為、俺と一緒に行こう」

まあ、副会長だから、転校生の案内とか任されているんだろうな。

「オレも一緒に行こうか？」

断固拒否する。お前の顔などもう見たくもない。

「水之さんがいるので、大丈夫です」

「だと。お前は早く教室に行け」

「ちえっ。ま、これからだよ。また後でね、かんざきちゃん」

百衣は手を振りながら、去っていった。

私は振り返す気もなかった。大嫌いな人種に手を振る事などしない。

「俺達も行こうか」

「はい」

朝から色々ありすぎた。やはり普通に過ごす事は無理そうだな。

それにしても、なんでこう絡まれるんだ？

私は普通に接しているだけなんだが……

【5話】ここで昔の知り合いが登場するとかおかしいだろ

水之の後について校舎に着いた。

ホームルームまで時間があまりないからか、人は少なかった。

注目されずに済んで私は内心ほっとした。注目されて、いい事なんて、今までなかったからな。

校舎に入り、そのまま職員室へと案内される。

ここまでの道のりの間、私と水之は何も喋っていない。

私としては楽だが、普通は色々聞いてくると思うんだが……まあ、そう思っけていても仕方ないか。

「ここが職員室。……失礼します。織原先生、おりはら転校生を連れてきました」

水之は職員室の扉を開き、スタスタと歩いていった。私はただその後をついていだけ。

ただちよつと引つかかるものがあつた。

オリハラ……どこかで聞いた名前だな……。

「おお、ありがとな、水之。ちよつと神前と話があるから、先に教室に行つていてくれ」

水之の言葉に返事をした男性は髭は生えつぱなし、髪はぼさぼさというだらしない格好であつた。

こんな人物は見た事ないはずなんだが、どこか見た覚えがあるんだよな。

「分かりました。じゃあ、神前君、また後で」

「はい、またお会いしましょう」

私は作り笑顔で水之に見せた。まあ、一応、案内してくれたから、これぐらいはサービスしないとな。

水之も笑顔で私に答え、職員室を出て行った。

数秒後、誰かの笑い声が聞こえた。

「『またお会いしましょう』とか……ぷぷ……」

どうやらオリハラと呼ばれた教師が笑っているようだ。私はその笑いを堪える姿を見て、思い出した。

「お前、織原卓登か」

おりはらたくと

私は周りには聞こえない程度の声で言った。笑いをこらえていた人物はこちらを向いた。

「あー、ばれました？」

「お前の笑いをこらえる姿は何度も目にしているからな」

「さすが嬢ちゃんですね」

彼 織原卓登は神埼組の元副組長で何度か会った事があった。

祖父にとつて、右腕的存在だと言っていた事も覚えている。

しかし、そんな彼がこんな所にいるとは予想外だ。しかも、だらしない格好で。

私の知っている彼はいつもきちつと背広を着用し、髪はオールバックにして、モテていた。

「なんで貴様がここにいる」

「組やめた後、教師になつたんですよ。今回は嬢ちゃんのクラスの担任です」

子供好きなのは知っていたが、まさか高校教師になるとは思っていなかった。

精々保育士だろう。まあ、ここにいるんじゃないやどうせくそ爺が根回しして担任にしたんだろう。

本当に外堀を埋めていくな、あの人は。

「分かった。私の正体はバラさない様にな」

「そんな事しませんよ。そんな事したら、関係者全員にボコられます」

私の事は企業秘密以上の極秘事項として扱われる事が多い。

大企業である上東グループの敏腕社長で裏社会では名前を知らない

者がいない神埼組組長と言う表社会と裏社会で名を馳せている人物が同一人物で女性でまだ10代と言うのは国を左右してしまう事だから。

まあ、周りがばらさなければ、バレないが。

キーンコーン……

「げ、ホームルーム始業のチャイムだ。行きながら、クラスについて、説明するな。」

あ、そのキャリーバックはここに置いていってくれ。こっちで寮に運んでおく。教室持って行っても、邪魔だしな」

織原が椅子から立ちあがりながら、早口で言う。これが『織原先生』というキャラなのだろう。

「分かりました」

私は荷物を置き、織原の後についていく。

「知っているだろうが、この学校は成績順でクラス分けされている。クラス分けはテスト結果が発表時に毎行われる。まあ、そういう面子は変わらないから、安心しろ」

クラス分けはテストの時、毎回か。面倒だが、その方が成績は上がりやすいんだろ。私には関係ない事に近いが。

「あー、ちなみに男子校だから、同性愛者が多いから、一応気をつけるよ」

「……分かりました」

一応とつけるあたりが織原らしい。

「後、もう1点。生徒内で【ランキング】と言うものがあるらしい【ランキング?】」

「【ランキング】は成績と容姿と人気でランク付けされているらしい。」

上位の奴ほど熱烈的なファンや嫉妬深い奴がいるから、関わらない

ようにしろよ」

ふむ……そうなると水之あたりはランキング上位者だろう。それなりの容姿だし、副会長だから、成績もいいはずだ。同じクラスだし、関わる事が多いはずだ。

しかし、織原は対処方法は言及しないのか。自分で考えろとも言
うのか？

「まあ、神前なら、上位に食い込むだろうよ。

くくっ、楽しみだな……」

……そっちなか。

【6話】自己紹介が成立しない

「ここがお…神前が所属するクラス。2年Sクラスだ」

織原、「お前」を言おうとして、訂正したな。まあ、普通に『お前』と言われても、私は気にしないが……。

もしかして、監視役がいるのか？ いや、あのくそ爺が決めた事だから、和輝達が監視役を配置するわけないはずだ。

「……一瞬、寒気がした」

織原が小声で言った。多分、独り言だろうが、私の耳が地獄耳のおかげで聞きとれた。

聞かなかった事にした方がいいだろう。

「呼んだら、入ってこいよ」

「分かりました」

「おー、席につけー」

織原がガラツと音を立てながら、扉を開ける。

元々騒がしくなかった教室がより静かになる。

「知っている奴もいるが、転校生だ。入ってくれ」

私は織原に呼ばれ、教室に入り、織原の隣で足をとめた。隣と言っても、1メートルぐらいは離れている。

「神前だ。みんな仲良くしてくれよ。じゃ、神前から一言言ってもらおうか」

面倒だ。と思うが、ここは普通に挨拶をしないと普通に生活は無理だろう。

「か「あ、かんざきちゃんだ」」

百衣……私より先に行ったはずなのになんで私より教室に来るのが遅いんだ……。

「よー、百衣。堂々と遅刻するたあ、いい御身分だな」

「あ、オリちゃんじゃん、ひさし〜」

……やはり百衣は苦手な人種だ。人の話をあまり聞いていない。「かんざきちゃん、2年生なんだ〜。やった、卒業まで一緒だね」お前の成績次第だ。まあ、こんな奴だから、この中では最下位に近いだろ。

一応、外面の仮面をつけて、対応するか。

「そうだといいですね」

「だいじょーぶだよ！ オレ、こつ見えて、頭いいんだぜ！」

自慢する事か。

「あ、信じていないでしょー。オリちゃん、オレの成績をかんざきちゃんに教えてやってよ！」

「面倒だから、やだ」

おい、受け答え出来ていないぞ。それでも、お前は教師か。

「面倒とか言ってるじゃねーよ、この不良教師」

「不良に不良呼ばわりされる筋合いはねえ」

「んだとお？」

なんでこんな雰囲気になるんだ。

「百衣、席につけ。神前君が困っている」

助け船を出したのは副会長の水之だった。さすが副会長。

「はいはい、分かったよ」

「先生、早く進めて下さい」

「ああ、すまねえな。」

もう面倒だから、神前の言葉はなしな

あ、飛ばした。まあ、私はどちらでもいいが。

「神前の席は水之の隣だ。分からない事があつたら、水之に聞けば、なんとかなるだろ」

放棄した。対応放棄したぞ、こいつ。全て水之に丸投げした。

「分かりました」

色々言いたい事あるが、とりあえず、席に着くことが先決だろう。
転校時の自己紹介がこんな形になるのは人生で初めてだな。

「宜しくな、神前君」

「宜しくお願いします、水之さん」

「かんざきちゃん、俺の前なんて、いいポジションだね！」

百衣、五月蠅い。少しは黙ってくれ。

「百衣、少しは静かにしろ。」

転校生も紹介したから、連絡事項言っぞー。

今日の模擬テストは午後からだ。

クラス分けに影響するから、真剣にやれよー」

……は？

転校初日にクラス分けに影響のあるテストがあるとか、おかしいだ
ろ。

……絶対狙ってきたな、あのくそ爺……

【7話】素で接する事にした

「午前は通常通りの授業だ。連絡事項は以上だ！。

授業サボるなよ、特に百衣」

「今日はちゃんと参加するよ〜」

「なら、いいがな。」

「じゃ、神前の事頼むぞ、水之」

「分かりました、先生」

織原は言う事だけ言って、さっさと教室から出て行った。

織原が出ていって、数分後、クラスメイトに私は囲まれそうになった。

まあ、転校生にはよくある場面だが、私はどれを回避できたようだ。後ろに座る人物により。

「お前等、かんざきちゃんに話しかけたら後で殴るからな」

織原が出て言って最初の言葉がそれってどうなんだ。もう少し優しい言い方があるだろ、優しい言い方が。

しかし、先程まで見せていたあの飄々とした百衣は何処にいったしまったのやら……。

まあ、おかげで質問攻めには合わないで済んだが。

「百衣に気に入られたようだな、神前君」

「……私は気に入られたのですか？」

「ああ、ここまでやる百衣は今まで見た事ないからな」

「そうですか……」

気にいられたくない。百衣は苦手な人種なんだ。数十分前までも関わらないと思っていた私が馬鹿だった。

「ちよつと貴式〜。オレを除け者にして、かんざきちゃんとしやべるなよ〜」

「俺はお前と違って、先生から頼まれているんだ。少しぐらいいいだろ」

「かんざきちゃんはおれのなんだから、オレの許可なく喋るなー！」「いつ、私はお前のものになった。」

百衣がいるせいか、心の中でつつこむ事が多くなったな。そういう性格ではないが、間違いは正したくなる性質ではある。

「頑張れよ、神前君」

隣みの瞳で私を見ながら、ぼんと肩に手を乗せた。

そんな隣みの目で見えるな。何も言えなくなるだろう。

「……そう思うぐらいなら、なんとかしろよ」

「そつちが素か？」

周りに聞こえないぐらいの小声で悪態をついたが、どうやら隣に座る水之には聞こえたようだ。

私よりも地獄耳かこいつは。

「何の事ですか？」

転校初日で素を出すなと言われていたから、無理にでも演技をする。まあ、口数は少なく、微笑んでいればいいだけだが。

「無理に演じるな。その方が俺も気が楽だ。呼び捨てで呼べるし」

「……無理して、君付けで呼んでいたんですか」

「一応、礼儀としてだ。このままの方がいいかい、神前君」

「……」

意味深な笑顔でこちらを見る水之。笑顔の裏に悪魔がいる。

こいつ、遥に似ている。遥と同じタイプなら、敵に回さない方がいい。後々、後悔するのは自分だ。

「呼び捨てでいい、水之」

「貴弑」

「は？」

「貴弑はね〜苗字で呼ばれるの嫌うんだ〜。」

あ、オレの事は龍彦たつひこって呼んでね〜。

オレにも素で接してくれていいから〜。かんざきちゃんなら何で

もオーケーだから」

私と水之の会話に入ってこなかった百衣が突然割り込んできた。チャラけているのに名前は立派なんだな、百衣は。

まあ、素でいいと言っのなら、素でいこう。

しかし、苗字呼ばれるのが嫌とは私と同じだな。私の場合、母方の苗字と限定されるが。

「そうか」

「うわっ、無表情になった。

笑顔でいようよ」

「素でいいと言ったのは百衣だ」

「そうだけどさ」

泣きつくな。うざい。

私は笑顔が苦手なんだ。第一私には似合わないんだ。

「君が例の転校生君かい？」

「え？」

いつの間にか私の目の前に男が立っていた。それなりの美系ではあるが、雰囲気 GOODMAN が好ましくない。

宝塚に所属している方の雰囲気に近いが、彼女達の雰囲気は彼のように高圧的ではなかった。

『転校生君』とは私の事だろう。

「ふん、顔はよさそうだけど、頭はすっからかんみたいっばいから、すぐにDに落ちるでしょうね。

心配して、損したわ。これで僕の地位も安泰だね」

そう言っ、彼はどこかへ行ってしまった。なんだっただ、あれは。

「あいつは紫原醍醐。学園長の孫さ。

傲慢で色んな奴に嫌われている。ギリギリSだったけど、かんざきちゃんが来たから、Aに落ちたんだ」

ああ、だから、私に突つかかってきたのか。

「……彼と同じクラスにはなりたくないね」

真面目な水之にさえ、そう言われる紫原はある意味すごいな。まだ百衣の方がましと言うことか。

「まあ、今日のかんざきちゃんのテスト結果次第だよな。」

かんざきちゃんもよくこんな時期にここに来たね。」

それはあのくそ爺こと、父方の祖父のせいだと言いたいが、ここは我慢だ。

「……色々あってな。まさかテスト実施日に来るとは思っていなかった」

今は6月上旬。普通の学校なら、定期テストが終わり、生徒達が一息ついている頃だ。

「普通そうだよな」。しかも、今回のテストって、全国模試のでしょ？」

「ああ。定期テストより範囲は広いし、問題も難しい」

今回のテストについて、何も知らない私に水之が説明してくれた。説明しても、対策は何もできないけどな。まあ、私にとって、テストは簡単な書類作成と同じだが。

「かんざきちゃん、今からでも勉強しとく？」

「いや、しなくてもいい。なんとかなる」

「すごい自信だな。他のは授業受けている振りして、勉強しているぞ」

一応、大卒なので。などと口を避けても言えない。

「そういう貴式たちは大丈夫なのか？」

「オレ達は大丈夫だよ」。貴式は学年2位でオレは3位なんだ。」

私は驚いた。水之は副会長と言う地位にいるのだから、それなりの成績優秀者だと思ったが、百衣が水之の次点だとは思わなかった。

「かんざきちゃん、驚いていないでしょ？」

「驚いているが？」

「全然そんな表情していない。」

かんざきちゃん、無表情すぎる〜」

「俺は無表情でもいいと思うが」

「貴氏には聞いていない」

隣が学年2位で後ろが学年3位……2人とも織原の言っていた【ランキング】上位者だろう。

まだ変な視線は感じないが、明日からはあるだろうな。

私は小さくため息をついた。

【8話】不良だからと言って、馬鹿ではない

午前の授業は何事もなく終わった。

私的に言えば、簡単な授業であった。もう少し実りのある授業を受けたいが、各分野の最高峰の大学に行かなければ、自分の欲求に答えられないだろう。

「かんざきちゃん、一緒に食堂いこ〜」

「行かない」

「なんで〜!?!」

転校生が人気者と一緒にいる所を見られてみる。明日から嫉妬の視線が突き刺さる。

共学でもそうなのに男子校や女子校はそれ以上だと、大学時代の知り合いが言っていた。

その知り合いは私の会社の海外支部で支部長をしている。……後で男子校について話を聞いてみるか。

国は違えど、雰囲気ぐらいは一緒だろう。昔、黒歴史で話したくないと言っていたが、話してくれるだろう。

「神前、お前の分、買っておいたぞ」

そう言うと、水之は私の机の上に2、3個パンを置いた。

「……頼んでいないが」

「ついでも買ってきた。どうせ買ってここで食べるつもりだっただろ?」

「そつだが……」

……そんなに私の思考は分かりやすいのか?

「一緒にいると、神前に迷惑がかかるのは目に見えている。」

だが、俺は先生から神崎を頼まれているから、離れられない。

食堂だと目立つが、教室なら、目立たないからな。

ああ、そのパンは俺の奢りだから、金は気にするな」
ふむ、どうやら水之はこういう事に関しても頭の回転がいいようだな。

しかし、奢るのは慣れているが、奢られるのは慣れないな。借りを作りたくないし、払おう。

「いや、払う」

「いい。俺が選んできたのを押しつけたし」

「借りは作りたくない」

「じゃあ、俺の願いを1つ叶えるのはどうだ？」

「……モノによっては割に合わないぞ」

まあ、殺しと社会的抹殺以外なら、なんとか叶えられるが。

「変な事は頼まない。まあ、今日のテスト次第かな」

テスト次第という事は勉強の事か？

学年2位の水之に私が教える事が出来るのは何もないと思うが……。

「……分かった」

「取引成立だな。さっさと食べよう」

「貴様、オレの分は？」

「自分で買ってこい」

「ひどっ！」

その後、百衣は仕方なく購買に行き、パンを買ってきた。

そして、なぜか私にお土産と言って、プリンを渡してきた。いらな
いと言ったが、「貴様と同じ位置につきたいから」と言って、強引
に押し付けられた。

百衣、お前も私に何か頼むのか。殺しと社会的抹消以外の願いを頼
むぞ。

このプリン、うちのグループ会社が販売しているブランド商品で試
食回数が3桁いく勢이었다な……。いい思い出がないが、味はい
いから、食べるか。

「そーいやー、あいつ来るのかな？」

「来るだろ」

「あいつ？」

誰のことだろう？ 私以外には転校生はいないから、在校生か？

「かんざきちゃんの知らない人でこの学校ではちょー有名人」

「あまり関わらない方が得策だ」

「貴式の言う通りかもねー。ま、あいつ、いつも1人だから、関わる事もないね」

「そうだといいんだが……」

2人とも、私に分かるように説明してくれ。

「ま、会ってみれば分かるよ」

ガラツ

「お、来たようだね」

百衣が小声で言った。何が来たのか気になり、私は扉の方を見た。そこにいたのは男だった。いや、男子校だから、男以外いないのだが。

身長は私と同じぐらいで男性的に少し低い方。ツンツンした雰囲気。の金髪。あれは染めているな。髪も痛んでいるようだ。

後ろ髪だけ伸ばしているのか、背中にかかる位ある。瞳は灰色の入った藍色の瞳。カラーコンタクトではないな。そうそうあの色の瞳は見ない。

親戚に外国人がいるのだろう。顔も整っていて、文句のつけようがない。後は雰囲気だな。

これで雰囲気は穏やかなものであれば、一般女子が言う所の『王子様』だろう。

だが、彼の纏って雰囲気はそれとは正反対だ。あれは不良だな。族とは少し関わりがあるかもしれないな。

「かんざきちゃん、あいつなんて見ない方がいいよ」

「ああ、睨まれたら、後が怖い」

「……そんなにやばいのか？」
どう見ても、普通の不良だぞ？

有名な組の幹部や他国のマフィアじゃなくて、ただの不良高校生だぞ？

一体、何が怖いと言うんだ。

……まあ、普通の人にとっては不良も恐怖の対象か。

「やばすぎなんだよ〜」

「あいつは黒屋忍^{くろやしのぶ}。」

この学園内の不良どもをまとめている。

確かあだ名は『暗黒王子』だったな」

「へえ……」

やはりあだ名にも王子がつくのか。しかし、この学園内のみなら、人数も少ないだろう。

ただでさえ、お坊ちゃま学校なのだから。

「それなのに、あいつ、成績は学年1位なんだよ〜。」

ありえねーよ」

ほう、頭がいいのか。それだと、見た目や世間の噂は信じない方がいいな。

今までの経験上、そういう奴ほど、中身はまともだからな。

黒屋か……どこかで聞いた事あるが……すぐに出てこないとなると、組関連だな。

後で和輝在学生の資料を集めてもらうか。

「不良だからと言って、馬鹿とは限らない」

「そうだけどさ〜。」

オレらとしてはやっぱ気になるんだよね〜」

「なら、勉強すればいい」

「勉強しても、点が届かない場合は？」

「自己解決しろ」

「かんざきちゃん、ひどい〜」

さすがの私でも勉強以外の点数稼ぎはないからな。

午後の予鈴のチャイムが鳴った。
テスト開始まで後5分となった

。

【9話】知り合いの遭遇率が高すぎ

あれから数時間、私はテストを受けた。

私には簡単な問題ばかりであった。もう少し捻った問題を出題して欲しかったな。

テストが終わったら、今日の授業は終了。

部活がある者は部活に、そうでない者は寮へと帰っていく。

「神前、寮まで案内する」

「貴方は生徒会はないの〜」

「転校生を案内するなら、来なくていいと会長に言われている」
「へ〜」

そういえば、まだ生徒会長には会っていないな。

まあ、頭がよくて、美系なのは目に見えているが。

「寮内は寮監が案内してくれる。」

俺はここから寮までの道案内だけだ」

「分かった」

「オレも行く〜」

「百衣は部活があるだろう」

ほう、百衣は部活をやっているのか。こつこつ奴だから、やっていないと思っただぞ。

「百衣は何部なんだ？」

「科学部だよ〜」

似合わない。

なぜ、科学部なんだ。

「こいつ、白衣が着たいからという理由だけで科学部に入ったんだよ」

「ちよっ!?!? 貴氏言うなよ!?!」

あ、他にも色々理由はあるよ」

「媚薬を作る為だったかな？」

「貴式！！！」

……まあ、百衣の事だから、理由は変な事だと言う事は分かって
いたよ……。

私は小さくため息をついた。

「……貴式、寮に行こう」

「ああ、百衣に関わっていると、いい事はないからな」

「ちよつ、2人とも待ってよ〜！」

百衣、本当にうざいな……。

校舎から寮までは徒歩10分ぐらいであった。

両方とも学園内の敷地にある。敷地広いな……。維持費がかなりの
金額だろうな。

水之に案内された寮は8階建てだった。外見は洗礼されているな。
どこの会社が建てたか気になるな。

「入口はカードキー提示が必要となっている。

今回はいらないけど、次回からは必要だからな。

入口入って、左側が寮監の部屋だ」

コンコン

水之が寮監の部屋のドアをたたく。

「はい。

あ、副会長君じゃない、どうしたの？」

中から出てきたのは茶髪の可愛い女性であった。

髪はクルクルと巻かれており、目も大きく、声も可愛い。

だが、どこかで見えた顔である。雰囲気もどこか感じた事がある。

だが、この雰囲気を感じていたのは確か男性だったはずだ。

「嵩霧さん、転校生を連れてきました」

「あら、そつなの。」

ありがとね、副会長君。

後は私の方でやるわ」

「分かりました。」

「じゃあな、神前」

「ああ、ありがとつ、貴氏」

水之は少し微笑んで、その場から去っていった。

「じゃあ、神前君。説明するから、中に入って頂戴」

「はい」

私は寮監に言われ、部屋の中に入った。部屋は至ってシンプルな作りになっていた。

置かれている物は機能的であり、デザインもいいものであった。

「いい部屋ですね」

「そうだろう。全部うちのブランドで揃えたからな」

先程までの可愛らしい声はどこかへ消え、低い男性の声がした。

この声は聞き覚えがある。私の会社と取引がある会社の社長

「ケルヴィン、なぜ、お前がここにいる」

「おや、フランス語で返してくれるのか？」

「せっかく俺の流暢な日本語を披露しようと思ったのに」

「なぜいる」

「そう怒るなよ、愛しのレイ」

「……毬まりに言いつけるぞ」

「君を口説こうとしたってかい？」

「そんな事を言っても、彼女は怒らないよ。」

「俺の恋愛対象にレイはいない事を知っているから」

「……嵩霧は毬まりの旧姓で目はカラコンか？」

「さすがレイだね。大正解だよ」

目の前にいる女性にしか見えない男性はケルヴィン・ロイヤード。世界的に有名なデザイナーであり、知り合いの建築デザイナーと共に立ち上げた会社の社長でもある。

上東グループとも何度も仕事をしており、外部の会社で零の事を知

る数少ない人物の一人である。

彼の妻である毬・ロイヤード 旧姓、かさぎりまり 高霧毬は父方の祖父が表の顔としてやってやっている道場に通っていた門下生で零とも仲良くしてもらっていた。

毬は上東グループの建築専門のデザイナーとして、勤めていて、2年前に仕事で会ったケルヴィンが一目惚れして、去年やつとの思いで入籍したのを覚えている。

……毬の交際条件が自分に勝つことだったからな……しかも、スポーツ系で。毬は運動神経よかったから、決着つくのに1年もかかったからな……それも手伝って、すぐに結婚となったがな。

『で、なんでいるんだ』

『そりゃ、君のお爺様に頼まれたからだよ』

やはりあのくそ爺が関わっていたか。

『あ、いつもはマリがいるから。』

今は出かけていないから、オレが代わりをしている』

『そういえば、ケルヴィンと毬は同じ身長だったな。』

しかし、毬は今、そんな髪型をしているのか？

あの子には似合わない髪型だが』

私の知っている毬は黒髪で肩にかかるぐらいのセミロングだった。

秀囲気もケルヴィンと違い、親しみやすいモノだ。

『髪の色は一緒にしてもらってるよ。』

長さはこれぐらいだね。

毬は何でも似合うから、困るよね。

こんな猛獣の中にいるのに気付かないんだから』

毬は元々鈍感だからな。視線とか気にしないからな。自分がどれだけモデルか分かっていない。

まあ、告白されても、「私に勝てたら、つきあってあげる」で返り討にされていて、告白する男子もいなくなったらしいからな。

ケルヴィン程、頑張れる奴も珍しいが。

『まあ、他人の事は言えないけどね』

『何がだ？』

『いや、何でもない。』

プライベートはここまでにして、仕事をする。

はい、レイの部屋のカードキー。

部屋は2人部屋になっていて、共同スペースとキッチンと浴室、各個人の部屋がある。

1階は食堂とコンビニがあつて、地下に大浴場、最上階にスポーツジムが入っている。

希望すれば、部屋の掃除も学園側で人を手配する』

『……察じゃないな』

お坊ちゃま学校と聞いていたから、予想していたが、予想以上だった。一般的に言われている寮ではなく、ホテルに近いな。

『確かにな。ここまでのはそのうそうない』

ケルヴィンはクスクスと笑いながら言う。私の事を知るこの男は私がどう思っているのか、分かっているんだらう。

『まあ、頑張れよ。「神前零サン」』

……私はケルヴィンが少し苦手である。私の嫌な事ばかりこの男は考えるからだ。

私はその日一番大きな溜息をついた。

【10話】関わりたくない奴ほど関わる事が必然

『お前は日本語使っな』

「なんでだよ」

『嫌だからに決まっているだろう。』

私が英語だったら英語、フランス語だったらフランス語、日本語だったら日本語で答える』

『仕方ないな。我儘お姫様につきあいますよ』

『お前の方が我儘だろう』

毬を手に入れる為に何度私の所に来て、毬の情報を寄越せと言ったのは誰だ。

「ただいまー」

ケルヴィンとの他愛もない会話をしていたら、1人の女性が部屋に入ってきた。

茶髪で軽くウェーブがついたロングヘア。目はぱっちり大きく、ちよつとたれ目。

髪の色は違うが、私のよく知っている毬その人であった。

「おかえり、愛しのマリー」

「ただいま、馬鹿ケルヴィン」

この2人の挨拶はいつもの事なので、無視だ。

「あ、零じゃない！」

やっと来たのね！！

もうこの馬鹿ケルヴィンしか話相手がなくて、死にそうだったの！」

……それはさすがに言いすぎだと思っぞ、毬。そんな言葉を聞いて、いまだニコニコとしていられるケルヴィンもおかしい。お前、

マゾだったのか？

「……久しぶりです、毬さん」

「ああ、普通に喋っていいわよ。」

寮の説明は馬鹿ケルヴィンから聞いた？」

「はい、一応」

フランス語でだが。まあ、私だからこそ、大丈夫だが。

「よしよし、仕事はしてくれた様ね。」

それじゃ、部屋に案内するね。さ、行くよ」

そう言っつて、毬は私の背中を押して、部屋から出す。

「馬鹿ケルヴィン、ご飯作っておいて」

「愛しのマリー、それが君の願いなら」

この挨拶もいつもの事だ。ケルヴィンが毬にぞっこんなのがすこい分かる会話である。

毬はうざいと思っつていらしい。毬自身がケルヴィンの本性をちゃんと知らないからな。

まあ、知っつても毬の態度は変わらないな。

私は毬に案内されて、エレベーターに乗り、7階のフロアに来た。

「……なぜ7階の角部屋……」

「空いている部屋がここだけだからよ。」

他の部屋より広いし、眺めもいいわよ」

いや、眺めとかいららないから。ここまで来るまでの時間がもったいないんだ。

「あ、同室者いるから、ちゃんと仲良くやってね。」

まあ、零なら、誰とでも仲良く出来るか」

いや、毬、私はそんな親切仕様ではない。人見知りで初対面相手にはすごく不愉快な顔するぞ。

普段は仮面かぶっつて挨拶するから、そう思われなただけだ。

ドアをノックするかと思っつたら、インターホンがついていた。普

通にマンションじゃないか……。

チャイム音がして、しばらくすると、ドアが開いた。

「……」

私はドアから出てきた人間を見て、どうしようかと考える。

水之、すまん。私にはどうしようもない事だ。

「彼は黒屋忍君。確か同じクラスだから、知っているかな。」

くーちゃん、この子は神前零君。今日からくーちゃんの同室になるから、宜しくね!」

そう、そのまさかだった。寮の同室者があの黒屋であった。

私は別にこういう人種にも慣れてはいるからいいが、今の私の周りがない……。

毬、黒屋の事を「くーちゃん」と呼ぶのか。大物だな、毬。

「……くーちゃんと呼ぶな、くそババア」

「いいじゃない、それぐらい!」

それとも、しーちゃんの方がいい?」

「……チツ」

黒屋は舌打ちをし、部屋の中へと去った。

「ごめんねー、くーちゃん、無口で」

毬、さっきの態度は無口で片付けられるものではないぞ、普通。

「黒屋とは知り合い?」

「あれ、零は知らないっけ?」

くーちゃん、道場に通っていた子だよ。

裏の関係で」

裏の関係 父方の祖父の道場は誰も拒まないのだが、裏の世界で有名なせいとか、組に所属している人の子が多かった。

多いと言っても、4割程で残りの4割は警察関連、2割はその他であつた。

ちなみに毬は警察関連で毬の父親が警官だったから。

元々うちの組は警察が作り出した仮染めの暴力団で組員の何割か

は警察官である。

うちの組が警察関連であるのは関係者と上層部のみしか知らず、情報漏らそうとした者は粛清されるらしい。

一応、組に所属する警察官はとある部署に所属するらしい。

花形部署ではあるが、厳しいと有名で警察官の間では新人時代を送りたくない部署No.1らしい。

まあ、聞いた話だから、本当にそうなのかは分からないが。

その為か、父方の親戚は組に所属している人よりも警察関連の人が多かった。

「へえ、そうか」

「零って、あまり道場に来なかったもんねー」

「人が多いのは苦手だから」

「そういえば、昔からそうだったね。」

じゃあ、後は2人で仲良くやってね。零の荷物は部屋に運んであるから」

そう言って、毬はエレベーターの方に向かった。

これから黒屋と2人か　まあ、こちらから話しかけなければ、話さないだろうし、なんとかなるだろ。

沈黙の空間は慣れている。

……関わりたくない奴ほど必ず関わる事になるのは会社でも学園でも一緒と言う事が……

【番外：01】錫羽良和輝と篠良木朱熹（前書き）

番外編です。

零の婚約者候補の

錫羽良和輝と

篠良木朱熹の話です。

【番外：01】 錫羽良和輝と篠良木朱熹

零を紫原学園に送った後、俺は都内にある零の自宅へ行った。

零が留守の間、家の管理は俺がやる事になっている。

零の自宅に行くと、普段、零の自宅に止まられる事のない見慣れた赤いスポーツカーが止まっていた。

「あいつか……」

零の見送りには来ない癖に零がいない時に来る。

俺は乗ってきた車をいつもの場所に止め、零の自宅に踏み入れる。扉が予想通り開いていた。

中にいた人物の予想通りだった。

「何している、朱熹」

その人物は主のいないリビングのソファに身体を預け、テレビを見ていた。

「あ、おかえり、和輝」

「『おかえり』じゃない。なぜいる。今日は撮影だろ」

色素の薄い茶色の髪を肩がかかるくらいまで伸ばし、前髪も瞳を隠す程、伸びている。

前髪に隠れながらも、藍色の瞳が存在感を出している。

彼 篠良木朱熹はモデルである。

元々、朱熹の親が跡取りとして、業界に慣れてもらおうとモデルデビューさせたら、爆発的人気が出た。

いまだに彼が表紙を飾る雑誌の売れ行きは他のモデルの倍である。その人気からドラマや映画の出演オファーが来ているが、全て断っている。

「早く終わったから、来たの。」

零ちゃんは……ああ、今日から学校か」

「そうだ」
「寂しくなるねえ」

俺達4人は予め零の父方の祖父である学まなひさんから今回の事に関して聞いていた。

自分が動くとき、確実に零にはれるからと、手続き等を全部俺達に押し付けた。

零の仕事が楽になったとはいえ、俺達は忙しい身。その場で仕事の押し付け合いが始まった。

「僕がやりたかったけど、病院の方で連続オペあるから、無理なんだ。」

みんな、ごめんね」

とニコニコしながら、一番年上の遙さんが言う。

遙さん、忙しいのは分かるが、毎回「やりたかったが」を使っているのか？

「私もこの時期は撮影で出張多いから、パス」

朱熹は持ってきていた雑誌のチェックをしながら、片手をヒラヒラと振る。

朱熹、お前の場合はやりたくないんだろうが。

「で、何やるの？」

梁は一部の人間に可愛いと言われる目で俺を見る。

梁、お前話を聞いていなかったのか……いや、梁に期待した俺が馬鹿だったか……。

「梁、お前は何もやるな。自分の仕事に集中しろ。」

朱熹、お前の所で保管している零の写真を何点か出しといてくれ。手続きで必要なはずだ。

遙さんは零の診断書書いて下さい。一応、主治医ですから。

後は俺がやっておく」

「和輝、ありがとう！」

「さすが和輝、頼りになる」

「和輝君、頑張つて」

いつもの事だが、最終的に俺が全部やる事になった。

それから転校当日までが大変だった。

学さんから「零には内緒で」と言う難題を突き付けられ、バレないように準備をした。

零は人より警戒心が強いから、何か些細な事でも気付いてしまう。

内緒事は常時、零の近くににいる俺がやるべきではないのだが、適任者がいないから、仕方がない。

そう思いながらやってきた。そのおかげか、零にはばれず、この日を迎えた。

「あゝ、行く前に会いたかつたな」

朱熹は持っているワイングラスを揺らしながら、言う。

いつも小言言われるから会いたくないと言っているのにこういう時だけ会いたいと言う。

「だつてさ、紫原だよ？」

それなりにレベル高いから、頭はいいし、イケメンも多い。

世の女性達を虜にする子のステータスとしては上出来。

零がひっかけて、何人かうちの事務所に入れるように画策しようかなつて」

俺の心を読んだのか、ワインを口にしながら、自分の考えを言う。

朱熹の事務所はそれなりに稼いでいる。今まで何人か有名俳優や女優等を他の事務所から引き抜いている。

だが、朱熹の事務所出身で有名になったのは片手に数えられるくらいだ。

そろそろ自分の事務所出身で人気者を出したいのだろう。

「それなら、自分の母校で勧誘活動すればいいだろう」

俺は朱熹の隣に座り、テーブルに置いてある使われていないワイングラスにワインを注ぎこむ。

「やだよ。」

顔が第一で頭は二の次な学校なんて。

しかも、全部あのおくそ学園長の好み。

二度とあんな学校に行くもんか」

「それには賛同するな」

俺と朱熹は同じ高校の出身だ。

親戚が学園長をやっている高校と言う事で仕方なく入学したが、最悪であった。

外見は綺麗だが、中身は汚れすぎていた。

高校時代の思い出が一番黒歴史であった。

朱熹も同じだろう。保育園・小学・中学・高校・大学全て同じ学校で同じ年な俺達はほぼ一緒にいたから、思い出も共有している。

「はあ、零はいいなあ。」

もう一回高校生やり直しなんて、そうそうできないよ」

「零は高校行かないですぐ大学だったから、やり直しではないと思うが」

「細かい事は気にしない、気にしない」

朱熹はいつもそうだ。細かい事は気にするなと言う。だが、俺にとっては気にする事だ。

一番零の近くに在る為、全ての事に過敏になる。

「カズ」

朱熹の右手が俺の頬を撫でる。

俺は朱熹を見た。その瞳はキラキラと光っている。

「駄目だ」

「え〜」

「えー、じゃない。」

週末、零に会いに行くから、それまでに仕事を終わらせないといいけない」

本当は零に仕事を持って行く事はないだろうが、現在進行しているプロジェクトは把握しているから、進捗状況を聞いてくるだろう。

それに答えられるように頭に詰め込まないと……。

「それって、週末まで仕事じゃん」

「そうだが？」

零が休みと言わない限り、俺には休みはないからな。副社長だが、身内には零専属の秘書と思われる。

「はあ……零もそうだけど、和輝はもうちょっと遊んだ方がいいよ。」

君達、根に詰めるタイプだから」

「オンとオフは切り替えている」

「切り替えているように見えないけど」

「切り替えている所を見せないようにしているからな」

「それじゃ、意味ないじゃん」

「零は気付くぞ？」

「私と零を一緒にするな。」

全く、和輝と一緒にだから、あの子まで無表情になっちゃったし……。

せつかくの女の子なのに着飾らないし、男子校に行っちゃうし、つまらない」

朱熹は男ではあるが、いる業界が業界の為か、服装等に関しては五月蠅い。

そして、服装に関して、一番無頓着なのは零だ。

服を選ぶのが面倒だからと、いつもスーツパンツ姿。部屋着は無地のTシャツかYシャツにジーパン姿。

朱熹が「もつとおしゃれなさい！」と言っても、「そんな暇ない」と言っつて、仕事をする。

女性らしくないと言えば、女性らしくない。だが、そうしたの俺達のせいでもあるから、あまり強くは言えない。

「ま、無表情のおかげで仮面も早々外れないし、学校でも楽しくやっているんじゃないかな？」

「……そうだといいが」

「あー、今回監視役いないもんね」

零と共にしない時は必ず監視役をつける。

零は表世界でも裏世界でも敵は多い。その為の人員だ。

今回は学さんから監視役禁止令を言い渡され、監視役はつけていない。

学さんの方で人をつけているだろう。

あの子は大事なものであり、大切な存在。

過保護とも言える俺の行動はすべて彼女を護る為であり、守る為ではない。

俺、否、俺達は彼女の盾。

全てを知る様で全てを知らない彼女を護る為の盾。

だから、彼女を愛そうと言う気持ちはない。

「学園生活、楽しいものだといいわね」

「変な事に巻き込まれなければいいけどな」

変な事に巻き込まれて、正体がばれたりしたら、色々大変になる。

「その辺は無理なんじゃない？」

零は本人が知らない間にトラブルに巻き込まれている事が多いから

「……そうだな」

「そう気を落とさないでよ、和輝。」

今日はパーッと飲もう！」

朱熹は俺をよく心配してくれる。嬉しくはあるが、時折、オーバーアクションになるのがネックだ。

「ああ」

俺はワイングラスに入れたワインを飲み干す。

零は今頃、寮で新しい生活を始める所だろう。

同室者が誰になるか分からないが、零は大丈夫だろう。

同室者は……心と身体が無事であればいいが……。

そんな事を思いながら、俺と朱熹はワインを飲む。

後日、飲んだワインが曰くつきのものだとなり、零に謝る事になった。

【番外：01】 錫羽良和輝と篠良木朱熹（後書き）

今回は10話までに登場した人物リストです。
その次に本編に戻ります。

人物紹介（10話まで）

神前 零 かんだき れい

上東 零 うとう れい

18歳。女性。

上東グループ代表取締役社長。

神埼組組長。

神前道場師範代。

幼い頃に両親と死別。その後、父方の祖父に育てられた。

海外の有名大学を15歳で卒業。

卒業後、すぐに上東グループの社長となり、数々の逸話を残した。

上東グループメインに時折、神埼組に顔を出している。

頭がよく、普段は他人に対して、警戒心が強い。

普段の警戒心だと、誰も近寄らないので、学園にいる時はかなり緩めている。

性別の事をあまり気にしない為、よく無頓着だと言われる。

上東グループ関連

錫羽良 和輝 すずはら かずき

22歳。男性。

錫羽良ホールディングス代表取締役社長。

上東グループ取締役副社長。

零の部下であり、婚約者候補。

主に情報系関連の担当をしている。

科野 遥 しなの はるか

28歳。男性。

科野病院院長。

上東グループ取締役。

零の部下であり、婚約者候補。

主に医療系関連の担当をしている。

笑顔が素敵なお兄さん。

篠良木 朱熹 たけのくみ しゆいか

22歳。男性。

篠良木芸能プロダクション社長。

上東グループ取締役。

零の部下であり、婚約者候補。

主にメディア関連の担当をしている。

苑汰 梁 そのだ りょう

20歳。男性。

苑汰警備会社副社長。

上東グループ取締役。

零の部下であり、婚約者候補。

主に警備関連の担当をしている。

紫原学園関連

水之 貴式 みなの きいし

16歳。男性。

紫原学園2年Sクラス。

生徒会副会長。

学年2位の成績。

優等生の雰囲気。

百衣 龍彦 ももい たつひこ

16歳。男性。

紫原学園2年Sクラス。

学年3位の成績。

チャラいの雰囲気。

黒屋 忍 くろや に

17歳。男性。

紫原学園2年Sクラス。

学年1位の成績。

零の同室者。

不良らしい。

織原 卓登 おりはら たくと

30歳。男性。

紫原学園教諭。

2年Sクラス担任。

担当教科・国語。

元神崎組副組長。

毬・ロイヤード 旧姓：高霧かさぎり 毬まり

27歳。女性。

紫原学園寮監。

神前道場準師範。

ケルヴィン・ロイヤード

32歳。男性。

毬の夫。

*** 親戚関連 ***

かんざき まなび
神前 学

70代。男性。

零の祖父。

神前道場師範。

神崎組総長。

全権零に譲ったが、陰で親しい者を使い、暗躍している。

【1-1話】料理をするじよは口亭（前書き）

1-1話内容変更しました。

【11話】料理をすることは日常

部屋は予想していたよりも広がった。

個人部屋の方はまだ見ていないが、この分だと、広いんだろう。

黒屋は扉の前に立っている。多分、あそこは黒屋個人の部屋だろう。

私はその隣にある扉の前に立つ。念の為、黒屋に聞いておくか。

後、口調は素ではなく、仮面かぶっておこう。

「私の部屋はここで合っていますか？」

「ああ」

不機嫌そうではあるが、いつもこうなのだろう。

私は自室となる個人部屋の扉を開けた。

中は予想通り広がった。

元々、ここに通う生徒の事を考えてのことだろう。金持ちは個室でも広いからな。

私としてはもう少し狭くてもいい。広いのは無駄なだけだ。

他の部屋も少し狭くすれば、この階にもう一室部屋が作れるだろう。

部屋にはベッド、学習用と思われる机と椅子、46インチと思われる液晶テレビが配置されていた。

確か共同スペースにも液晶テレビがあったよな……。テレビなんて1つあれば、十分だろう……。

毬の言う通り、織原に預けた荷物が置いてあった。

他に2個の段ボールもある。

和輝が先に送っておいた荷物だろう。私物があまりない私にとって段ボール2個の荷物は多い方だろう。

私は右腕にしている腕時計を見た。

時計の針は6時半頃を指している。

夕食をとってから、荷物の整理をするか……。そういえば、食堂の営業時間を聞いていなかったな。

あまり使わないだろうが、明日、毬に聞こう。

私は自室から出て、キッチンに向かった。

目的は冷蔵庫の中身。何も入っていないければ、食堂で食べるしか選択肢がないが、何かしらあれば、作るうと考えた。

私は料理が好きだ。元々、毒が盛られている事が多く、仕方なく自分で料理をするようになった。

やり始めてから、料理の奥深さを知った。それからはよく時間があれば、自炊をするようになった。

ここ最近は何となく、時間がとれなかったが、ここにいる間は毎日料理をするように心がけよう。

冷蔵庫には食材が入っていた。しかも、2、3日は買い物に行かなくてもいい量が。野菜室や冷凍庫も冷蔵庫と同じような感じであった。

何も入っていないと予想していたが、何でもあるな。

まあ、毬と親しいようだから、毬が見に来るのだろう。

もしくは私に来るから、用意してくれたんだろう。

後で礼を言っておかないとだな。

私は冷蔵庫から食材を取り出していると、黒屋が私の元に来た。

「……………何している」

かなり睨んでいる。私は何か変な事しているか？

「料理をする所ですが」

「……………できるのか？」

「まあ、一通りは」

なんだかんだでプロの料理人から教わった事もあるからな。

「……………れ」

「はい？」

「俺の分も作れ」

なんで黒屋の分も作らないといけないんだ？

まだこの時間なら、食堂がやっているだろう。

「……食堂の方が早く出来ますよ」

「食堂の飯には飽きた」

飽きたの一言で終わらす事か。

「早く作れ」

「……」

これは何を言っても聞かないタイプだな。仕方がない。ここは私が折れるか……。

「分かりました。……アレルギーはないですよね？」

最近の若者は軟弱なせいか、アレルギー持ちが多い。私の知り合いにはそう言う奴はいないが、気をつけなくてはいけない事だ。

「ない。嫌いな物は」

「好き嫌いは受け付けません」

誰が嫌いな物を言えと言った。アレルギーが出ないのなら、何でも食べれるだろう。

全く、最近の若者はこう言う所が駄目なんだ……。

……こういう事を言っているから、朱熹に「年寄りくさい」と言われるのか。

あいつ、外見や言葉遣いに凄く五月蠅いからな……。

黒屋は私に何か言いたそうだったが、私が聞く耳を持たないと分かると、共同スペースにあるソファに座り、テレビを見始めた。

暇なのであろう。まあ、そんな黒屋を無視して、私は料理にかかる。調味料も調理器具も一通りある。

黒屋は料理しないように見えるから、毬が私の為に用意したんだろう。

いや、ケルヴェインかもしれない。なんだかんだであいつは私の事を知っているからな。

まあ、そんな事よりも料理をしよう。

黒屋の分も作るとなると、あまり凝らない方がいいだろう。凝ると時間がかかるからな……

数十分後、黒屋が共同スペースとキッチンとの間にあるテーブルの上に並んでいる食事を見て、驚いていた。驚く事でもないような気がするが……。

テーブルの上にはペスカトーレ、シーザーサラダ、オニオンスープが置いてある。

「どうかしました？」

「……これ、全部作ったのか？」

「あまり時間がなかったので、簡単なものですけど」

時間があれば、もう少し凝ったが、空腹であるう相手を待たせるのは忍びないからな。

「これが簡単なもの……？」

「はい」

「……お前は主夫か……」

初めて「しゅふ」と言われたな。

まあ、そう言われても、仕方ないか。普通の男子高生はここまで料理ができる奴もいないだろう。

そんな会話をした後、私と黒屋は席について、食事をした。

ちよつと塩が強いな……もう少し、薄味にしよう。

「おい」

突然、黒屋が話しかけてきた。食事の時ぐらい静かに食べてさせてくれないのか……。

「何ですか？」

「それ、やめろ」

「それ？」

「敬語」

……なにか変な所でもあったか？ それとも、黒屋は敬語が嫌いなのか？

「なぜですか？」

「水之達の会話を聞いてた」

確かに貴式と百衣の会話では敬語使っていないな。しかし、そんな会話を聞いている黒屋もおかしい。

「よく聞いていますね」

「敬語使うな」

……本当にこいつは人のいう事を聞かないタイプだな。

「……なんで貴式達の会話を聞いてたんだ？」

「好きで聞いた訳じゃない。他の奴らが喋らないのが悪い」

敬語やめた途端、素直に答えた。これは俗に言う『デレ』と言う奴か？

しかし、教室で誰も喋っていなかったとは気付かなかったな。席が廊下側で廊下の喧騒を教室のものと思っていたかもしれないな。

黒屋との会話はそこで途切れた。

私が考え事を始めたせいだが……。黒屋も他に話す事がないのか、黙ってしまったので、私だけが原因でもない、はずだ。

食事を終え、私は食器を片付ける。黒屋も食事のお礼か、食器を流しまで運んでくれた。

「おい」

「何」

「朝も昼も作るのか？」

「朝は作るが、昼は考えている」

寮生活の一般男子が昼食は弁当と言うのは少し乙女過ぎるかと考えている。

まあ、しばらく学校の食堂には足を踏み入れないとすると、弁当も選択肢に入るが。

「なら、昼も作れ」

「なんでだ」

「俺も食べる」

「……は？」

黒屋はこんなに人に懐く奴なのか？

いや、そんなはずないだろう。だが、今私に話しかけている奴はそうとしか思えない発言をしている。

「なんで私が黒屋の分も作らないといけないんだ？」

「俺がお前の料理が好きだからだ」

そんな告白いらない。

「どうせ一人分も二人分もあまり変わらないだろ」

いや、作る量が多くなるだろ。変わらないとか言うのは限られた人だけだろ。

どうせ人の事なんて考えない奴だから、意見を変える事はないな。

面倒だが、やるしかないか。

黒屋に対して、妥協する事が多いな……。

「……分かった」

部屋の荷物の整理の前に明日の準備をしないとだな……。

弁当箱があればいいが……。

【12話】朝から一騒動

その後、私は明日の食事の準備（主に下ごしらえ）をし、部屋に置かれている荷物を整理した。

整理が終わった頃には0時を過ぎていた。

睡眠時間が1時間でも大丈夫な生活をしていた私にとって、まだ起きていられるが、一応、健全な学生生活を送る為、シャワーを浴び、就寝した。

転校1日目としては、まあまあの生活であろう。

翌日、私は5時に起床し、その足でシャワーを浴び、身支度を整える。

HRの開始時刻は8時ちょうど。今日の授業の支度は終わっている。後は朝食と昼食の準備だけだ。

「しかし……これか……」

私は目の前にある物を見て、溜息をついた。

昨夜、弁当箱を見つける為、キッチンの棚と言う棚を見た。しかし、一般的であろう弁当箱は出てこなかった。

代わりに出てきたのが私の目の前にある重箱だった。

なんで重箱があるんだ……普通ないだろ……。

私は重箱を隅々まで見た。昨日見つけた時はあまりよく見ていなかった。

よく見たら、一般的な重箱ではないようだ。しかし、市販されている重箱でこのような重箱は見た事ない。

こんなものを置く奴となると、一人しかない。

ケルヴィンめ……試作品を置いていったな。

昼食の弁当作りは後回しにし、まずは朝食を作る事にした。

さすがに重箱を黒屋が持つとは思わないしな。私も遠慮したい所だ。朝食が出来上がる頃、黒屋が個室から顔を出した。服はまだ着替えておらず、上半身は裸体で下は寝間着用と思われるズボンをはいている。

「どうやら匂いで起きたようだ。」

「……早いな」

「そうか？」

時計は6時25分頃を指している。

寮から校舎まで徒歩10分、支度に20分、食事に20分かかるとすると、7時に起きないと時間に余裕がない。

そう考えると、早くはない方だと思う。

「……」

黒屋は何も言わず、浴室へと入っていった。

浴室の脱衣室に唯一洗面台があるので、顔を洗いに行ったのだろう。私は昨夜から食卓として使っているテーブルに朝食の用意をした。

黒屋が朝からどれぐらいの量を食べるか分からないので、普通より少し少なめにしておいた。

朝は食べない奴もいるからな。

用意し終えた頃に黒屋が浴室から出てきた。髪が濡れているので、シャワーを浴びたのだろう。カラスの行水並みに早い。

しかし、髪を乾かさないのとはどうかと思う。最悪、風邪をひくからな。

「黒屋、髪を乾かしてこい」

「面倒だ」

……私が朱熹であれば、罵声を浴びているな。遙だと、10分の説教だろうか。

そんな事は今はどうでもいいか。それより黒屋の髪をどうにかするか。

私が考えている間に黒屋は席について朝食をとろうとしていた。

「待て」

「気になるなら、お前が乾かせばいいだろ」

そう来たか。黒屋は我儘以上だな。こういうのを『俺様』と言うのだろうか。

さすがに乾かすまで面倒は見られない。気になるが、気にしないようにしよう。

私も席に着き、朝食を食べる。

そういえば、昼食について言わないといけないな。

「黒屋」

「……なんだ」

「昼食なんだが、重箱しか弁当箱になる物がなかったんだが、それでもいいか？」

「……」

さすがの黒屋も黙るよな。

「……重箱は何個ある」

「1個だ」

重箱が複数あるのは弁当屋などだろう。正月ぐらいしか使わない家庭もあるからな。

「……はあ」

なぜ黒屋のため息をつかれないといけない。私の方がため息をつきたいくらいだ。

「重箱でいい。お前が持って行け」

「黒屋が持って行け」

「なんでだ」

なんでとはお前のクラスでの立ち位置を考えると。

ほとんどの生徒が私と黒屋が同室だと知らない。

そんな中、転校翌日に転校生と不良が仲良くしているのはどうかと思っ。

「私は購買で買う」

「二人分作ってあるだろ」

昨日、見ていたか。下ごしらえの時、視線を感じていたが、気付かない振りしていたからな。

「黒屋が誰かと食べればいい」

「そんな奴いない」

「なら、黒屋が買って食べるか？」

「誰がそんな事言った」

これは平行線になりそうだな。妥協点がないから、まとまらない。

「お前が弁当を持って行って、俺と一緒に食べばいいだろ」

それが嫌だから、他の案を提案しているんだ。

それぐらい察しろ。

「それとも、お前は俺と食うのが嫌なのか？」

「嫌だったら、この場で一緒に食事をしないが」

「なら、いいだろ」

「……」

黒屋と言う人物が分からない。

不良と言うのはこういうものに变化したのか？

私の知る『不良』はもっとこう威嚇的で排他的なんだが……。

「零？」

黒屋に名前を呼ばれて、私は黒屋の顔を見た。

この学校に来て、生徒に初めて名前で呼ばれた。

貴式や百衣は私の名前を知らない。まともな自己紹介をしなかったから。

昨日、毬から紹介された時に名前も一緒に告げられたのを覚えていたのだろう。

「なぜ、名前で呼ぶ」

「お前の苗字を呼びたくないからだ」

そういえば、うちの道場で通っている一部の奴にくそ爺を尊敬してか、苗字さえ口にするのが憚れると言う思考を持っていた。

黒屋もそう言う人種なのか。そうは見えないが、あまり突っ込まない方がいいかもしれないな。

「そうか」

「嫌か？」

「何が」

「昼と一緒に食べる事」

……なんでそこに戻るんだ！

【13話】結果は予想通り

私は仕方なく黒屋と昼を共にする事になった。

名前の事は気にしない事にした。黒屋について、気にする事を諦めたに近い。

私は弁当の支度が終わったのは7時半頃だった。

寮を出る前に寮監の部屋の戸を叩いた。

部屋から顔を出したのは昨日と同じように女装したケルヴィンだった。

『……なぜお前が出る』

『イタリア語、やめる。』

あまり、喋れない』

なんとか喋れるだろう。しかし、片言になっているから、あまり振らない方がいいか

『じゃあ、スペイン語だな』

『いや、じゃあ、とかじゃなくて、初めからスペイン語で喋るよ。』

俺がマスターしているのは日本語と英語とフランス語とスペイン語だけと言うのは知っているだろう』

『どうでもいい。毬を出せ』

『……ちよつと待つてろ』

ケルヴィンが戸を閉め、しばらくしてから、毬が出てきた。

「零、どうしたの？」

「弁当箱を買っておいてくれないか」

「ん、分かった。1個だよな？」

「いや、2個頼む」

「え？ 零、もう誰かと付き合っているの？」

……なぜ、そういう話になる。

「いや、黒屋が自分の分も作れと言ってきた」

「へ〜……今日はいいの？」

「ああ、部屋になぜか（・・・）重箱があつて、それを代用している」

私は紙袋に入れた重箱を毬に見せた。毬の眉間に皺が寄る。ケルヴィンとよくいる毬ぐらいになれば、少し見ただけで誰のデザインだか、分かるようだ。

「分かったわ。……馬鹿ケルヴィンには後できつく言っておくね」
「……頼む」

私がケルヴィンに言うより、毬が言ってくれた方が得策だ。毬を怒らせると、どうなるか知っている私は毬に全てを任せる事にした。

寮の入り口に行くと、百衣が私に気付き、手を振ってきた。

百衣の隣には貴式がいた。

「かんざきちゃん、おっはよ〜」

「おはよう、神前」

「おはよう」

「なんか荷物多いね〜」

百衣が言う荷物は紙袋の事だろう。やはり目立つな。

まあ、今日だけだから、我慢しよう。

「そうでもない」

「ふ〜ん。」

そういえば、もう結果貼り出されているらしいよ〜」

「いつも通りだな」

「結果？」

何の結果だ。昨日行われたテストの結果ではないよな。普通からして、今日明日で全校生徒の採点が終わる訳ないだろう。

「昨日のテストの結果だよ〜」。

うちの学校って、クラス編成に関わるからって、テスト実施日に即採点できるように人雇っているんだよ〜」

それは凄いな。だが、そこまでする必要あるか？ 人件費がかかるだけであろう……。

「後でちゃんとした所で採点した結果が出るが、ほぼ誤差がないからと、その結果でクラス編成している」

貴氏が百衣の説明に追加してくれた。いや、普通、ちゃんとした所の結果を待つだろ。

無駄遣いといしか言いようがないだろ。

これだから、金持ち学校は……。

そんな会話をしながら、私達は校舎に着いた。

テスト結果は各階の渡り廊下に貼り出されると貴氏が教えてくれた。元々、各学年の教室が階毎に別れているから出来る事だろう。

私達の教室がある3階に着くと、人だかりができていた。

3年の教室がある2階も人だかりができていたが、3階はその倍以上であった。

「うわっ、なにこれ〜」

「いつも以上だな。何かおかしな事でも起こったんだろう」

何回も繰り返している百衣と貴氏の反応からこれは異常のようだ。

「……チツ」

後ろから舌打ちが聞こえ、私が振り向くと、そこには黒屋がいた。どうやら私より遅く来たようだ。寮の部屋を出たのは黒屋が先だったはずだが、気にしないでおこつ。

「邪魔だ」

「前の奴に言え」

そう言っつて、私は黒屋に道を開けた。黒屋は無言で前に進んでいく。

「かんざきちゃん、よくあいつと話せるね。

他の奴だったら、怯えて、道を開けるんだけど」

私は黒屋の事を怖いと思っていけないからな。後は同室のおかげで一応まともな奴なのは分かっている。

「その話は後だ、百衣。」

黒屋のおかげで道が出来たから、行くぞ」

貴式の言う通り、黒屋が通った所が一本の道となっている。黒屋が横を通ったと思われる生徒の顔色は悪いが、一次的なものだろう。道はどうやらテスト結果が掲示されている所に繋がっているようだ。貴式の後を私と百衣は付いていく。

百衣は所々で「ごめんね」「ちょっと通して」と言いながら、付いてきている。

ちょうど私の後で道が途切れるように生徒が動いているようだ。まあ、相手が百衣だからだろうが。

そんな事を考えて歩いていたら、誰かの背中に顔をぶつけた。一歩後ずさると、ぶつかった相手が貴式だったと分かった。

貴式の視線はテスト結果の掲示にいつている。その表情は驚愕を表していた。

「どうしたの、貴式」

追いついた百衣が立ち止まっている貴式に声をかける。

「あれを見る」

「テスト結果がどうした……」

貴式に言われ、百衣がテスト結果の掲示を見て、止まった。まるで時間が止まったように。

何がそこまでそうさせるのか、私には分からなかった。周りにいる生徒が私より少し身長が高く、私にはテスト結果が見えなかったからだ。

私の身長は女性の中では高い方だが、男性の中に放り込まれると、低い方になる。

「二人とも、どうしたんだ」

「……神前、見えないのか？」

「生憎、前にいる生徒より身長が低くて、見えない」

「ああ……こつちだ」

貴式が私の腕を掴み、引っ張る。世の女性たちは男性にこつちして

もらえる、喜ぶだろうが、私は嬉しくもなにもない。

「ここなら、見えるか？」

貴式に連れてこられたのはテスト結果の掲示の近くだった。そこはなぜか人が少ない。

意図的に人がいなくなっているような……。原因はすぐ近くにいた。黒屋だ。

ここまで生徒に恐れられている黒屋が茫然とテスト結果の掲示を見ている。

私はテスト結果の掲示を見た。

1位	神前零	500点
2位	黒屋忍	492点
3位	水之貴式	480点
4位	百衣龍彦	476点

・
・
・

ちなみにテストは各教科100点満点で5教科合計で500点満点だ。

「これがどうかしたのか？」

予想していた通りの結果だったので、私は平然としていた。

その様子に貴式や百衣、黒屋まで私に視線を移した。

……私は変な事を言ったか？

【13話】結果は予想通り（後書き）

読んで下さり、ありがとうございます。

累計PV6000超え致しました。

様々な方に読んで頂けて、嬉しいです。

これからも『男装』を宜しくお願い致します。

【14話】変な事はしていない

その後、私は貴式と百衣にテスト結果が貼り出されている廊下から教室に連れてこられた。

2人に片腕ずつ掴まれていた私は他の生徒から見れば、強制連行されているように見えただろう。

まあ、半分そうなのだが。

「神前、あれは偶然じゃないよな？」

「偶然で満点取れる訳ないだろう」

運がいい奴はそうかもしれないが、私は生憎、運がいい方ではない。

どちらかと言えば、運が悪い方だ。

今までもよく運悪く（・・・）死にかけそうになったものだ。

「つまり、あれがかんざきちゃんの実力？」

「まあ、そうなるな」

「うそだろ……」

「おい、零」

貴式が何か話そうとしていたが、それを遮って、黒屋が話しかけてきた。

教室がシツと一切の音がなくなった。

廊下から漏れてくる生徒の声が鮮明に聞こえてくる。

ここまで静かになるのかと私は思った。

「なんだ」

「お前、神前道場の者か？」

「ああ、そうだが」

「段持ちか？」

「段は覚えてない。」

道場内の職位は師範代だ」

「！……そうか」

黒屋は一瞬驚いた顔をしたが、すぐにいつもの表情に戻り、自分の席へと戻っていった。

教室では沈黙が続いたが、しばらくして、いつもの喧騒が戻ってきた。

「ねえ、かんざきちゃん」

「なんだ、百衣」

「いつの間に黒屋と仲良くなってるの？」

「別に仲がいい訳ではないが？」

私は首を傾げた。さっきのは仲がいいと言えるのだろうか。普通に話したただけだ。

「だって、下の名前で呼んでいたよ」

「苗字で呼びたくないらしい」

本人にちゃんと確認した訳ではないが。

「へ。じゃあ、オレも『レイちゃん』って呼んでいい？」

「許可しない」

「え、黒屋だけずるい」

百衣が私に抱きつこうとしたので、伸びてきた手を叩く。

「近付くな」

「え、友達なんだから、いいじゃん」。

スキンシップは大事だよ？」

「スキンシップ多可は好ましくない」

「じゃあ、近付かない代わりに『レイちゃん』って呼んでいい？」

名前をちゃん付けで呼ばれるのは嫌。だが、それ以上に抱きつかれるのは嫌。仕方がない。ここは百衣に譲歩しよう。

「……分かった。呼び捨て（……）で呼んでくれ」

「え」

「これでも譲歩した」

「仕方ないな」

百衣はつまらないという表情をしながら、自分の席に着いた。朝のHRまで後数分となっていた。

百衣と話している間、貴弑が何も話しかけてこなかったな。

貴弑は自分の席に座り、ずっと黙ったまま、何かを考えているようだった。

「貴弑？」

「ん？ 黒屋とはもういいのか？」

どうやらまだ黒屋がいると思っていたようだ。黒屋が来た時からずっと考え込んでいたようだな。

「黒屋はもう自分の席に行ったぞ」

「ああ、そうだったか……」

「大丈夫か？」

「え？」

「何か考え込んでいたから」

「あ、ああ、別に大丈夫だ……」

「お前ら、席につけー」

織原が教室に入ってきた。どうやら朝のHRの時間になっていたようだ。

それから昼休みまでは何事もなく、過ぎした。

昼休みに一波乱が起きる事を予想していたが、大事になるとはこの時の私は考えもしなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2267w/>

男装は当たり前ですが？

2011年10月18日00時53分発行